舞臣院様御議抄

詞花和歌集

亀田[illegible]

も
十八番

544
シ
59
78

新千載和歌集

544
シ
59

詞花和歌集 飛鳥井殿雅綱卿

飛鳥井殿雅綱卿 詞花和歌集

514
シ
59

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182153

詞花和歌集巻第一

春

堀河院御時百首哥奉りける時
たつこゝろをよめる

大蔵卿匡房

こほりゐし志賀のから崎うちとけてさゝ浪よする春風そ吹

寛和二年内裏哥合によめる

藤原惟成

昨日かもあられふりしは信楽のと山のかすみ春めきにけり

天徳四年内裏哥合によめる

平兼盛

氷たにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯のこゑ

道命法師

たまさかにわか待えたる鶯のはつねをあやな人やきくらん

題しらす

曾祢好忠

雪きえはゑくの若菜もつむへきに春さへはれぬみ山への里

冷泉院春宮と申ける時百首哥たて

ところの家にしよみ侍れ　源重之

春日野にあさみつゝきし梅の花は香をのみ人にとめてのこれや

ある人の家七十賀の屏風に子日してゐたるかた
ところをよめる　赤染衛門

萬代のためしには君か引まゝは子日の松もうらやみやせん

梅花遠薫といふ心をよめる　源時綱

吹くれはかたも定めぬ梅の香をいつかたよりか春風そふく(?)

梅の花をよめる　左兵衛督大納(?)

梅の花匂ひを道のしるへにてあるしもしらぬ宿にこそいれ
見しらす

心ある人そとひける春の夜は霞にのこるやなかりけるかな(?)

鶯をよみ侍る　俊恵法師

谷こそ草流のこゝろにけれ源氏よいつか鶯のこゑとたえぬる(?)

僧都覚雅

あをやきの葉のみとりにもゝ鶯のこゑをきくかな(?)

天徳四年内裏歌合に柳をよめる

平兼盛

さほ姫の糸そめかくる青柳を吹なみたりそ春の山風

贈左大臣家哥合に侍りけるによめる

源季遠

いつまてはわかいて歎春風によしともみる人青柳の糸

古郷の柳といふ心を　源道済

古さとのかきねの柳よ春ことにたまそめかけし朝みとりそて

題しらす　源頼政

たち山のすそのとしてさくら花はなによにつもれなけく

京極前太政大臣家に哥合し侍ける歌に

よめる　康資王母

くれなゐのうすはなさくらにほはすはみなしら雲とみてやすきまし

此哥を判者大納言経信紅の桜は詩に作れるをよめる歌にはいかゝとてまけになりにけり

宇治にて朝かほの康資王の母君のもとに

つかはしける　京極前太政大臣

志らくもは立へたつれと紅のうすはなさくら心にそそめ

ぬし

康資王母

白雲はたちゐぬれと見のはてはかと見ゆれとそしまえ

おなし歌合によめる　一宮紀伊

朝またき霞こめたる山桜尋ねもゆかむよそ目にても

大蔵卿匡房

しら雲と見ゆるにしるしみよしのゝ吉野の山の花盛かも

承暦二年内裏　大納言経信

山桜をしむにとまる物ならは花は春ともかきらさらまし

遠山桜といふ心をよめる

前斎院出雲

ふもとより白雲と見えしはなかなかに山の桜の盛なりけり

題しらす　戒秀法師

春ことに心をそらになしはてゝ花は雲井に見えてこそ盛なれ

白河に花見ありけるにかくよめる

源俊頼朝臣

しら河の春の梢を見わたせは松こそ花のたえまなりけれ

遠き花を尋ぬといふ事をよませ給ける

春宮　白河院御製

春くれは花の梢にさそはれていたらぬ里のなかりつる哉

橘俊綱朝臣のふしみの山荘にて水辺桜花
といふ心をよめる　源師賢朝臣
池水の汀ならすはさくら花影をも浪におられましやは
一条院乃御時ならの八重桜を人の奉り
けるをそのおり御前に侍りけれはその
花を給ひて哥よめとおほせ事侍
りけれはよめる　伊勢大輔
いにしへの奈良の宮この八重桜けふ九重ににほひぬるかな
新院のおほせことにて百首歌よませ給ける
時よめる　右近中将教長
古郷にとふ人あらは山さくらちりなむ後を待てとこたへよ
人ゝあまたさそひて桜花をたつねにまかりて
侍りしによめる　源登平
桜花ちらはおりて帰らむとしも思はぬ人をうらみ
題しらす　道命法師
春の夜のよるなきかをとこゝろえてらうへて思ひしれ
帰雁をよめる　贈左大臣母
古郷の花のさかりはいへやあかるらん流てあひある春の唐合

源忠季

あくよなきとかくしやおりかへもとをきれにかくかりるを

桜花なきとこよなる　藤原元真

はるかぜはたえて吹きつるはるのみそ人のこゝろもちるらむ

天徳四年内裏哥合によめる

大中臣能宣朝臣

桜花風にしたがふ物ならばさてもや花のちるをまたまし

大皇大后宮哥合に遣はさるべき哥とて人々よみ侍りけるによめる

よ硯のふたに雪をいれてもてまゐれて侍りけるをさかづきにして侍ける

相模

桜ちる庭をとふ人は跡は雪と成りにけり

何わろしたが家の庭に桜花ちらぬさきにと待もなくそよめ

源俊頼朝臣

たく人もなきわか宿の庭のおもは花ちるさへそ見る人ぞなき

橘俊綱朝臣のふしみの山荘にて人々落花

といふ事をよめる　源師賢朝臣

桜咲く木のした水はあさけれと散しく花の淵となりける

藤原通房朝臣の家にて老人惜花といふ

ことをよめる　藤原範永朝臣

散花を惜むとや残りなき身はつきておしむへき

庭の桜乃散を御覧してよませ給

花山院御製

我宿乃さくらもしかし散ことにこゝろよはくも成せらるれ

桜花散をみてよめる　源俊頼朝臣

身のうへを惜しむ春の花の春ならし我よはひをは何に海

落花満庭といふことをよめる

花園左大臣

庭もせにつもる雪とみえなからかほるや花のしるしなりける

題しらす

大中臣能宣朝臣

散花はせきとめける山川のふかくも春の成にけるかな

寛和二年内裏歌合によめる

藤原長能

一枝もあらぬ節ゝとはしらしかさねまし春山吹の花

麗景殿女御家歌合によめる歌

よみ人しらす

卯花さけるかきねは月よりもしろくそ見ゆるよるのさかりに

堀河院の御時百首歌たてまつりける歌

大皇太后宮肥後

ちる衣もまたかけ山の[illegible]まつほとゝきすいつかきなかむ

新院位におはしましし時牡丹をよませ給ひけるによみ侍ける

関白前太政大臣

さきしよりちりはつるまてみしほとに花のもとにて廿日へにけり

老人惜春といふ事をよめる歌

橘俊成

老ていそ春のおしさはまさりけれいまいくたひもあはしとおもへは

三月盡日うへのをのこともめして春をおしむこゝろをよませ給けるに

新院御製

花はねにとりはふるすにかへるなり春のとまりをしる人そなき

[illegible]

詞花和歌集巻第二

夏

卯月のついたちの日よめる

増基法師

春ふをし夏衣にぬきかへてあはれなるやまのした人

題しらず

源俊頼朝臣

雪の色をぬすみてさける卯花はさえでや人にうたがはるらん

斎院長宮にて侍るとしかねよかり

くれかさは清りみつゆひて侍るにかはりてよめるき

らし人恋ハ世て待つよし絶なん

大蔵卿長房

身残色への声かあふしかるらん時鳥のまさて鳴らさ哉

袖ぬらせとよめる　源兼昌

袖に今最山ちやをとかく人中まつて鳴まつ袖かな

郭公を待てよめる　周防内侍

むかしおもふわか我身に時鳥まつへきたらは惜からまし

関白前太政大臣の家にて郭公を聞と

いふ事を詠てよき代待るにたらぬる

藤原忠兼

時鳥なくのつては世中に待しと思ふ我身成けり

題しらす　花山院御製

おもふにたまらて物辞と時鳥世よいなかきて我とさき世よ

山寺にこもりて侍けるに郭公のなき侍けれ

はまきいなら免れし　道命法師

山里のかひもあるかな時鳥今年もかく居待辞

題しらす　能因法師

山ひこのこたふる山の郭公一声なけは二声そ聞

藤原伊家

郭公暁乃第一鳴聲を待ねまち旅覚乃人屋雲乃人

大納言公教

待人乃こぬ夜乃秋色みきさに時鳥鳴猶ハ夏れちらうきき

雨中乃郭公といふ心をよめる

源俊頼朝臣

ぬきこゑて雅よそいさし郭公きゝ里のはるかにおき ゐし
聲しら涙

待賢門院堀河

こやの池におふるあやめのなかき根はひく白糸の心ちこそすれ

土御門右大臣の家に哥合し侍けるに
よめる

源頼実朝臣

みなかみをそかくたてゝ夏なかりしにぞ渡る橋を渡るさへまされ
きこゆ

皇嘉門院治部卿

五月雨の日数つもれはまこもかり屋そせの浪に聲清成

堀河院御時百首歌たてまつりける
時よめる

大蔵卿匡房

見えしこそやはたの屋荒又月夜にいそかるゝ人夜の水

右大臣の家哥合し侍ける時によめる

源忠季

五月雨に難波ほり江のみをつくしみえぬや水のまさるなるらん

郁芳門院乃菖蒲の根あはせに

よめる　中納言通俊

もしほやく海の浦々たえてけりけふりも見えぬ五月雨の比

藤原通宗朝臣哥合し侍けるに

よめる　良暹法師

五月雨や花たちはなに吹風はたか里まてか匂ひ行らん

世をそむかせ給て後花たちはなを

御覧してよませ給ける　花山院御製

宿ちかく花たちはなはほりうへし昔をしのふつまと成けり

なてしこの花をよめる

藤原経衡

うすくこく色そみえけるなてしこの花の露をそ人にとはなけ哉

贈太政の家乃哥合し侍けるによ

める　修理大夫顕季

たなはたに我みてこそ花さかりいく秋萩の下葉のさえ見え

寛和二年内裏乃哥合によめる

大貳高遠

鳴聲もきこえぬ物のあはれは思ひはよるの蛍成けり

六条右大臣の家にて歌合し侍りけるに

よめる歌　よみ人しらす

五月雨に狭川よりて瀬かはりけれ数まさる杜は蛍盛なり

秋近き色乃納涼はふりて残よめる

藤原家経朝臣

風吹は河をも涼しくみゆる浪の立かへるさへうらやまれき

題しらす　曾禰好忠

杣川の筏のとこのうき枕夏は涼しきふしと成けり

長保五年入道前太政大臣の家にて歌合

し侍りけるによめる　源道済

結瀧よ夏の水にく涼しきは木のまてかへる山の月

題しらす　曾禰好忠

川のせに夕くれ涼しく流せる麻をさせはさきのとまりけり

同六月もとによめる　太皇太后宮大貳

流れゆくかすは今日も人七夕のあふ瀬もふけにけり

題しらす　相模

下紅葉一はつゝちる木のしたに秋とおほゆる蝉の聲かな

曽禰好忠

むしの音もまたうちとけぬ草村に秋をかねてもむすふ露かな

詞花和歌集巻第三

秋

題しらす　曽禰好忠

山城のとはたのおもを見わたせはほのかにけさそ秋風は吹

津の國に侍けるに大江爲基かもとより
のほりて侍まゝにいつしかとありけれは

僧都清因

君すまはとはましものを津の國のいくたの森の秋の初風

七月七日式部大輔資業かもとにてよめる

橘元任

萩のうへにとかくいとゝゆふにハ七夕もこやはるハ月影人

おもひくらしかるせ行く七月七日よさり坊

給ふ夜　　花山院御製

七夕は衣もぬきてかすかさにかてこそそらさるゝ涼の神

長暦二年内裏哥合によめる

藤原經衡朝臣

七夕にハ心をかしておもふらん明日のわかれを悲しかるらむ

思ふとそ　　加賀左衛門

伊つみきハたそ見ゆるらん天の河のせにハゆかさきかさゝき橋

新院御かく百首哥よみ侍ける

よめる　　左京大夫顕輔

天の川よこきる雲や七夕のそらたき物のけふりなるらん

寛和二年内裏哥合よめる

大中臣能宣朝臣

おほかたハ月かけやまの京に天河ハ一としひとよのせのまゝハ

七夕をよめる　　修理大夫顕季

天の河あきりハいそきわたらんあさせたとる水の音かな
よ

橘俊綱朝臣の伏見の山荘にて七夕後朝
の心をよみ侍　良暹法師
あふ秋はなかはしてせ七夕のゆふへにのみや清るらん
藤原顕綱朝臣
七夕の絲つかにはくるしきもあかぬ別はつきせさりけり
題しらす　祝部成仲
天の河かはらぬものと七夕を浦山しくやけさは見ゆらん
三条太政大臣の家にて八月十五夜
水上月といふ心をよみ侍
源順
みきはに色まさる秋の月さへやよゝをへて君にひかれん
題しらす　右大臣
いつもみる月そとおもへと月影の秋のこよひは照すなるらん
家にて歌合し侍りけるによめる
藤原為成
秋の夜はやゝかたふきぬ秋の夜の月まてはいつか悠さるらん
月とのみ見しよくもせぬる哉
三条院御製

秋ぞまとあふ毎にのりしさきての月をたなへ
もろりと　天台座主明快
あまたゝびいはもなかりけるの中にいつの梅は秋の夜の月
関白前太政大臣の家にてよめる
藤原重基
秋のよの月まつ人の山は木の間(?)さやけさかなり
むかしの庭さへかはらぬものはゝりて月と
見へくよめる
良暹法師

天津風雲吹はらふ久方の空(?)すむよの月
京極前太政大臣家歌合によめる
源雅朝臣
秋の夜は月に心のひまぞなきいづるをまつといるををしむと
関白前太政大臣家にて月の心を
とよめる
藤原朝隆朝臣
えく弱よけふまてへく松坂の関ちかくも月はさやけき
左衛門督家成が家に歌合し侍りけるに
よめる
隆縁法師

秋乃夜は露もくもらぬ月をさへおきところなき我ハ宗祇
月ともりつる袖とよあれ
大江嘉言
あさみよの月猶あかしおもへハ鳥のいくつ夜山深に住乃人
月浮山の水にうつ(?)る手紙よあかぬ
藤原忠通
姨山乃あつされ(?)く御(?)にゐる(?)月をさ(?)へ月はなくさめかね(むろ)
寛和二年内裏歌合ありしよませ
給ひける　花山院御製
秋乃夜の月に心のあくかれて雲井に物をおもふ比哉
題しらす　源道済
独かておもひの宿は萩の葉に風そよくまて秋の夕暮
大江嘉言
萩のうへに宿る秋風吹ぬなりこほるゝやらむ露の白玉
和泉式部
あき吹ハいかなる色の風なれハ身にしむはかりあはれなる覧
曾禰好忠
みよし野はさゝ山陰によしもなく秋せしにそのまとこそあれ

藤原顕綱朝臣

萩のえに露ゆかしとは木枯は音をたてじといはぬなりけり

霧といふ題よめる　源兼昌

夕霧に木末もみえず初瀬山入あひの鐘の音はかりして

法輪にまうでて侍りけるにさが野に花おもしろかりければ
見さしたく侍りけれど人てよめる

赤染衛門

秋の野の花見る程の心をはゆくとやいはんとまるとやいはん

賀茂のいつきときこえける時本院のすいがいに
くれは槿の花のさきかゝりて侍りけるをよ
める　禖子内親王

神垣にかゝるとならは槿もゆふかくるまて匂はさらめや

堀川の院御時百首歌奉りける
時あさかほ　隆源法師

うやあさましくてはかなき朝かほのまよふかたちかな

白河院鳥羽殿にて前栽合せさせ給ひ（宮う）
ける時よめる　周防内侍

あさからぬ露おきとけの萩の花いとゞへよかひけくらいぼ

敦輔王

萩の葉にうつろふ花の秋にはにほひてそふる
むしらす

曽祢好忠

秋の野の草村ことにおく露は夜なく虫の涙なるへし

永源法師

いさむしろ常よりも有明の我もかり虫の音や大方あらす

和泉式部

鳴虫のひとつ声にもきこえぬは心々に物やかなしき

みちの国の任はてゝのほり侍るに尾張乃国なるみの野にて虫のなきけるを聞てよみ侍る

橘為仲朝臣

古郷にかはらさりけり虫の音はなるみの野辺の夕暮の声

天禄三年女四宮哥合によめる

橘正通

秋風に露を涙となく虫のおもふ心を誰にとはまし

駒迎をよめる

大江匡房

あふ坂のこえゆく月のかけはせいくきの駒といふらん

永承五年一宮哥合によめる

蘭

ふく人の色やかにゝほひみえつるは我たのめにしかたみなりけり
題しらす　藤原伊家

秋ふかき草の枕にふしわひてうつらふ露の色を見るかな
九月十三夜に月照菊といふ事をよませ
給ひける　新院御製

あさねかみ花よりはなをみだれてなひく下葉に月もやとりけり
関白前太政大臣の家にてよめる　源雅光

霧はるゝめくりに見えは白菊のうつろふ色をまつそ見えける
題しらす　道命法師

こゝろしてきく人へき花なれはうつろふ菊の色をみせける
藤原輔忠

草のはらのなかさきまつ露にみえてうつろふ菊の白菊の
宇治前太政大臣白川にて見物侍けるによめる
堀川右大臣

実に植るはこゝろありける菊の花あたちの原に見えけるかな

武蔵国のかたにある三河国の二村

山乃紅葉を見てよみ侍る歌

橘能元

いくかへりて見れともあかぬ紅葉ハの錦なれはや二村山といふらん

寛治元年太皇太后宮の哥合によめる歌

大蔵卿匡房

夕されは何かハそれと紅葉をも見えてさてゝ山ハ秋てこそ見え

むしろとも

曾禰好忠

山里ハ秋こそものの見えぬらん秋の木葉のつもりなる

まかりて清輔よろこひ侍る歌　秋大井河

小紅葉の流るゝを見てよめる

道命法師

よるの(?)ハあやしとわかおもひしかとおもふに秋ハ紅葉の錦とそ見

雨後落葉といふ事をよめる歌

源俊頼朝臣

ふかなく時雨ハてハふりしきる木葉ハ紅葉ちるらん

月乃あかきよりみちの歌とてよめる

平兼盛

あきはてて月もこの海ぬ我宿に紅葉を風そ吹ける

一条摂政家障子におもしろき紅葉のいと
みくしりあかゝくにゝなる所とよめる

藤原惟成

何さらく紅葉ちらなとあらし吹はおのかはなおもく散

神君とよめる　大中臣能宣朝臣

紅葉てもとにはふきゝみかけまるらん野をさとのあさちにて交付にまれ

西中九月尽日といふ夜よめる

前大納言公任

いはふ秋のゆくらん我宿にこよひはかりはあすやとせく

詞花和歌集巻第四

冬

題しらず　曾禰好忠

何事も行ていのらむとおもひしに神無月にて成にける哉

ときはなるかさゝへちりて冬まてはしらぬ風をあはれよ哉

家に歌合し侍けるに落葉をよめる

大貳資通

槙のやにあはれかは紅葉の色も冬ともそそなたか

題しらず

左衛門督家成

冬くれはよそにしるかな時雨よ紅葉はなにかおもひてあきそはてぬる

大江嘉言

山ふかみ落てつもれる紅葉のかはける上に時雨ふる成

落葉埋橋の心といふ事をよめる

惟宗済頼

今更よそのゝ橋をたつねても木葉ちりしきにはそかくる

落葉ふかくあれたるといふ心をよめる

風吹はならのうら葉のそよくくといひあはせつゝいつち散らん

題しらず

曾禰好忠

み山よりしくれからまた吹風の音きくからに冬はきにけり

よみ人しらず

秋はてゝ霜おくまてもくまもなくてらすかの月は冬こそさやけかりけれ

東山に百首歌よみ侍りけるに時雨の心を

よめる　左京大夫道雅

もろともに山めくりする時雨かなふるにかひなき身とはしらすや

旅宿時雨といふことをよめる

瞻西法師

いほりさすならの木陰にもる月のくもるとみれは時雨ふるなり

天暦御時の屏風にあしろに紅葉おほく

よりたるかたかけるをよめる

平兼盛

深山には嵐やいたく吹ぬらんあしろもたはに紅葉つもれり

霜枯をよめる　藤原長能

霜かれはそこともみえぬ草のはらたれにとはまし秋のなこりを

堀河院の時百首歌たてまつりけるに

よめる　大蔵卿匡房

山ふかみ庵のとほそのけふよりやくもゐのうへに雪はふりつゝ

大和哥よみて侍ける時入道前太政大臣のもと
にて初雪をよみ侍りける
藤原義忠朝臣
峯を遠みくもりし空は山のはの雲まとみえしけさの初雪
見しらす　大江嘉言
日くらしに山ちをみゆる時雨しは峯のこそ〔?〕雪にそ有ける
大蔵〔?〕道原
杉〔?〕山の嵐のさむく夜はさむくてくちしもかへりよ雪ふりつもる〔?〕
新院位おりゐし時雪中眺望の心
いふことをよませ給ひけるによみて侍ける
関白前太政大臣
紀のくにの梶〔?〕も雪ふりにけりほかはふりつみ山のしるしか
見えす　和泉式部
まつ人のしてまつほとはせんかたなき庭の白雪
〔?〕の心をよみ侍る　成尋法師
ねやのうへにつもれる雪のおとせぬはよるのまにまにさえまさりけり〔?〕
藤原経忠
むさしのゝかなはたしれなし見やりつゝあはれ〔?〕

詞花和歌集巻第五

賀

一条院上東門院に行幸せさせ給けるに
よめる　　　入道前太政大臣
君か代にあふくま河のそこきよみ千世をへつゝすまむとそ思ふ
正月一日子の日にあたりて侍りけるにむつきはしめ
とてよめる　　　伊勢大輔
めつらしき今日ふたつそむつきなる子の日のむつきさそふへきかな
一条左大臣家の障子に絵書たるにかきつける所に

よめる　　　大中臣能宣朝臣

色ふかくみゆるときはゝいにしへのわか代ハちよをゆきつる松

長元八年宇治前太政大臣家歌合に

よみ侍る　　能因法師

君か代ハつきもしなまし住よしの松ハ千たひのおひかはるとも

むすふす　　赤染衛門

榊葉もよにいはれいはくいはつ神の代ゝをしつめてそ久しき

三条太政大臣の賀の屏風の料に読人

て侍る人にかはりてよめる

中務

あそのゝく梅さかへて桜花ちりつきてつきせさらなる

何ゝ人君ゝ三人よかふわきさせたらける又乃日

いひおくりける　　清原元輔

松嶋の磯よりきへあまりのとれぬさ波くむくもあれ

上東門院の屏風に十二月つくらせ給ひさかき

題不知　　前大納言公任

一ゝ世をとらまゝめと何かおもひへきつかせあまおのまよひてハ

河原院よりつくる歌合ゆるかり

松川池といふところにて

恵慶法師

年まにし池のへにおふる小松こそやこれあまた松の千とせハ

後三条院住吉御幸にまゐりて先歌

よみ人しらす

君か代のひさしかるへきためしにや神もうゑけん住吉の松

後冷泉院御時よろして住吉に詣てゝよめる

歌　　大納言経信

住吉のあら人神のひさしさに松いくたひか生ひかはるらん

詞花和歌集巻第六

別

三議ひろなりたゝてはいよのかみに
くたりけるにいひつかはしける

民部内侍

越にくおもひけれとも伊予すたれにこそかけはなれぬ
身ならはたゝひとまつ後されし国のかみそ

くわう宇面よれつりしあはれ

和泉式部

ともにたゝましものをみちのくの衣の関をよそにきくかな

左京大夫顕輔か播磨へまかりけるに
いひつかはしける　源俊頼朝臣

忘るなよいそくとも松のときはなるあさかけは
橘則光朝臣ともの国のかみにてくたり侍

けるに餞しはへるとてよめる

藤原輔尹朝臣

このたひのわかれのかたみにとめおきしゆかりのあと
かなしみのそかれ侍りとくらのよ

ゆふされはなみはなかれけるなるか

藤原道雅

ゆふしてとはふさたみのきさいよとふか月もかゝるなるか

大納言経信太宰帥にてくたり侍りし

河尻にゆふくれあひくにあそひ

律守国基

むゝ世にそ君はいさしらす住吉の松へき身そいて老はて

庭よ侍る女房の日向の国へくたり侍るに

餞行にてよしといひつかはしける

一条院皇后宮

あゝひさす日のむらいて思ひてよ熱にまとふ舟こそ

弟子に侍る女ともはこのおやまかりて人

の国へまかりけるはなむけにそへける

年

法橋有祥

別れは墨とも母と橡衣くりわの袂くめて神なら

月ころ人悲しかにもとりて侍るか

ゆめのあふにかひとくれぬ

玄範法師

みこむと頼みてえ宮そいひとつ頼みていかのふ氣のつ頼みし

もろこしへまかり侍るを人のいさめけれ

ばよめる　寂照法師

ゆく人をまつしらてのほとは流れてつひに栖のすゝ

人のよにはひさくゆくつ日ありしこひ恋

あるか

僧都清因

ねふりみさう我君にそめしと思は我さへ里に別ぬる哉

大納言経信大宰帥にてくたり侍り

俊頼朝臣のわすれはいひつかはしける

太皇太后宮甲斐

筑紫はなれそめにし我のこゝろ郷へさいて今日とふおもひおこせよ

橘為仲朝臣みちのくにのかみにてくたりけるに

太皇太后宮の大盤所よりとてなきとはいひて

東路のはるけき道をゆきかへりいつかとくへき下紐の関

修理大夫顕季大宰大弐にてくたり侍

けるにまかるとていひつかはしける

権僧正永縁

立別るはるかにいきの松なれは恋しかるへき千代の影かな

東路へまかりける人の宿にまかりて侍ける
に暁にかへらむとしけるによめる
くりすい女
よろつよもあきのわかれのかなしきは侍らぬ人をとゝむへ
て見ん

詞花和歌集巻第七
恋上
恋の哥とてよませ給ける
関白前太政大臣
あや敷て我やまもれぬ人の名にわりなく人に流すてふ袖
むらすなす
藤原實方朝臣
伊かての思ひありてもしらすへき室の八嶋の煙ならてはこそ
澄恵法師
くくたいいそれなるへく無名しらすやそれとさへ身をやせめん

堀川院の御時百首哥たてまつりける時
よめる　　大蔵卿匡房
なきひの日影ふくるそむかしかはるものは流のかはりけるかな
むしかなを　　平兼盛
若川のはるとふくかせの氷とくらむ春たちける日前斎女御のかはりて流
てよめる　　一條院御製
秋の夜は恋しき色とおもひて月はかはらぬかけそあはれなる
永暦四年内裏哥合によめる

我せこはいつくそとしつまれきくおとよりとて
新院の位におはしましし時とのゐところにて
とのゐ所にて禄給ての恋といふことを
世保ける歌によめる
左近清輔朝臣
みてしよかくていてや名をしりたるをこそ人のつまにもせし
寛和二年内裏哥合によめる
藤原惟成

命あらはなにかはあらん世の中にみをもなきものとなりはてぬとも

左京大夫顕輔の家にて歌合し侍ける

恋しらる歌

大納言成通

しるらめやあまたのとしをへしまゝに人にしられてあるくはなくも

むすほれて

覚念法師

恋しかも君はあるれいはとこそ中々はなし人にしらまし

つれなき女に心つくしけるか

加茂成助

伊勢の斎宮の浄土寺にこもりたまへりけるにまゐりてさす

むすほれて

浄蓮法師

我たのむ流るゝ人をきさらきになよ竹のはかなき世をや恨む

女をあひ思ひて逢はすなりにけれは恨みて

関かなる心はにのかれて女のわかれて

侍りける歌

平兼盛

忘れなむ今すらはゆくきはことはいく恋しきをまたとなきさ

むすほれて涙

よみ人しらす

よそにくもてふ富士の山ハなにもあかぬかたハ我もまへさまし 哉
説也是ハ古井てさまたけへらてかよひくるもかの瀬の
思ひしおもへていふ返しきハ命の我のこころうき人

能因法師

いさくもよふの秋やけれらのさりし世をさてなすみ命 時
なさけもあるましかりける女御にて思ひ
くいふ世をうとかりしそくまつらいし 奇
さはいきそてけるをいひあまて後五月へ
てなりひあきわくゆのたし夢れ

前大納言公任

つらかりけるは世中といふ人に(ことはり)のすくなに
三井寺に侍ける童を京よりてかのすなすれ
守りと契りて侍るを後京へおもわとやけ
きこえてそつ給ひけるをまことにいひけれ
けし守為

僧都覚雅

多守刀へもぬ君ハなさし秋の月をもやけへ(これをまたりけり
伝のふかくき守なれ女ワ七月七る作の人
しる哉

大納言通経

七夕はけさ川舟の綱おろしたちしきとそやゝみかへ

恋の歌とてよめる

隆縁法師

身のほとを思ふにもあらぬものゆゑやつれなき人の恨みなるらん

左近の権少将家成か津国の山庄にて旅宿恋といふ心をよめる

侘つゝもおなし都はなくさめき旅ねそ恋のかきりなりける

冷泉院春宮と申ける時百首哥たてまつりけるによめる

源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物を思ふ比哉

堀河院御時百首哥たてまつりけるによめる

修理大夫顕季

我恋はよしのゝ山のおくなれやおもひいれともあふ人もなし

題しらす　平祐挙

むねはふし袖はきよみか関なれや煙も浪もたゝぬ日そなき

藤原永実

伊たつらにちゝのくちにつれなきとす袖のわたる海よ思へるかな

まに成てあらむと思ふあたりの女のさと
にあるとききけるよしいひつかはして
守親　　　道命法師
山ちかく住ける頃小咲へきわたりし人につかはしとてさしける人
堀河院御時菊合にかへしける賢　贈賢康
つかまつりける女とものかたにいひおほせけると
よみて人を見つけてきくの白菊の花をりやりて
御ともとて　源家時
菊とめて人のあはぬはなつかしもいくたびかありし白菊の花

ぬへし女よりかはしてさし　大納言公実
志らぎくのはなのいろたのもしきにつけて君がすむとは
中納言俊忠家歌合によめる
藤原顕綱朝臣
紅葉はをあらし吹くよをたのむとも恋の深山の峯に侍りし
むかしの頃　源顕仲
思ひつゝ涙やしるき紅にそめまし袖はわれからぞ苦
久しくいひける女のかへりことにいふ人今
文はかへすをせよといひやるとていひつかはしける

源雅光

紅に涙の色もなりにけりかはるは人のこゝろのみかは

左京大夫顕輔か家に歌合し侍けるによめる

平實重

逢ふ事は身にそおもへとたのむらんかくつらきこそ命なりけれ
恋しらぬとも

題しらず

道命法師

恋しさは君にのひくさあはぬ夜をまつさき我なにこそは
まし

藤原道信朝臣

うれしきは伊かはかりかはおもふらんうきは身にしむ心ちこそすれ

むかへの山に歌合し侍けるによめる

心覚法師

恋しさはうき身さへこそおもはるれ後の世にても逢見んと
契しと

大中臣能宣朝臣

見ることもかたき思ひの涙にはわれもこゝろのぬれつゝ袖は

よみ人しらす

我恋はみやまかくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

山寺にこもりて日比侍て女のもとへいひ
つかはしける

藤原範永朝臣

氷しく春はせよそに山川の下はなを跡もとめしや

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原親隆朝臣

風吹ばをちかたのはしにすひくとくのかはらてあれ

乞しつ淡

新院御製

浪とくや岩にせかるる流河のよとてぞ乗よあそへしき

曾祢好忠

くれなゐにそむ葉あからよ人ぞ遊てお流哉

冬の流くまに向くそむかひのかぜをむか

よくくり稀くつし流りし守庵

道命法師

薄ふく蒼梅にかりし名日ののこてまさねもとぞあらわ

家乃哥合にあけるにあれ

中納言俊忠

慈覺く精ふきを尾にあきをかけてお流る瀬や春のなき

詞花和歌集巻第八

恋下

人しれすかよひける女のおやき〻ていさめけれは
くいみしく逢かたくなりにけれはいひつかはしける
とていくあしきわさ侍るといひ侍りけれは
よめる

藤原相如

恋しさは我のおもふこゝろはおほかれとやは流るゝの行衛も

題しらす

藤原道経

我恋はあひをあくまてほとらむしかなちるの見えす侍とも

女のもとより暁帰りてつかはし
けり(?)ける　　清原元輔

秋とのみたれをしへけむあかつきのわかれとはなくなく露やおきける

左京大夫顕輔の家にて歌合し侍
けるによめる

　　藤原顕広朝臣

心ともなきにこそはちりまかへもみちを風やさそふらん

めつらしき秋ゆく帰る船にいひつかはし侍りける　藤原実方朝臣

竹のよにほめて露にあらぬかなれとて秋とこそおもひしより侍

長月の晦の日紅葉しめらるか女のもと

へつかはしけるかへりことに

　　よみ人しらず

こふ人のかすもしらめこそ我はたゝそての露けさそまさる

藤原保昌朝臣に具して丹後の国へ

まかりけるに忍ひて物いひける男のもとへ

いひつかはしける

　　和泉式部

秋の夜やおりひとこせしあらさらんへたちまてこそ物思ひ
物をいはなとわかのかりへいはゝし
字為　大江為基
思ふ事なくてこそみめ世中につねならぬこそはかなかれ
よのまゝ世にもきえさけ為おとこそ秋のあはれなりけれ
らしもまくこゝろけきしるにいはゝ
かりし　字紀　一宮紀伊
浅茅原かけつゝみへこそや秋の露かかれ
女のかたにかよはんたちの心さしも

いさはえ為もあふまくきこしはしぬ世界みえし
しよかれ　坂上明意
せさこし為ゆきやみるとのつゆさよかならぬ秋にあらさけ
むまつと　恵慶法師
あふさかはまゆるにかめのつまゆきまた我をもしのひけなく
寿慶法人心いうふとるゝあけ
右大臣
いはくらにゆきのかくれにしてはつ我身なれ
男にかよひまつのきけりにそつきえるけふ

おほかたの前栽は露をおきてもかなしく
あれ　赤染衛門
しげりにしおひの露のおく世は猶秋の悲しさ
むしつす　曾禰好忠
朱ならでめなきしはらし夜半の明の月もかなしき
新院位におはしましける時涼輿不来恩と
いふことをよませ給ひけるによみ侍る
関白前太政大臣
来ぬ人を恨もはてし契りおきしその言のはも情ならすや

見しつらむと　和泉式部
夕暮に物思ふことはまさるやと我ならぬ人にこゝろ庵
月のあかゝりける夜思ひ出ることありて
たゞならぬ袖わかれにし人はいかばかりけむ
渡く人おもひやるらん見ゆる月をみてなけ
むしつ次　よみ人しらず
忘れじと我を人とおもふもわすれはてそすみなれやるべき
平兼盛
あふさかや滝の出れとみる人おもひきえいかにしてすま

弟子成ありけるわらはのもとにやりて人の国
へまかりて侍りけるが久しく見えさ
侍らさりけれは忘れにけるにやといひ流
かはしけれは　寂巌法師
わするのもこれにはいはれにもやまとにてあかぬ名残の
女のめのとなる男ほしやかくて猶ありにあるたり
竹の葉に霰のふりかゝりけるを聞
てよめる　和泉式部
竹のはにあられふるなりさらさらにひとりはぬへきこゝちこそせね

なをさりにあるおとこへいひやりて
けるか　相模
ありふるもうきよなりけりなからぬ人のこゝろをいのちともかな
かしこまる人のもとに抱いふ事ある
といひつかはしけり　清原元輔
うきことのわすれかたきは物のみなしなれはこそ成ぬ
こゝろをとゝせぬ男にいひつかはしける
俊子内親王大進
いかなれはとしもむすひし恋咲く花の色にて村にかつそめけむ

家に哥合侍りけるにあひてあはぬ恋と
いふことをよめる　中納言国信

あふことも我心よりありしかは恋はしぬとも人はうらみし

藤原仲実朝臣

くち[illegible]ひとつとはかりかへらなく[illegible]清の[illegible]やはせる

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原基俊

浅茅生にけさおく露のさむけくにかれにし人のなそや恋しき

[illegible]たる男につかはしける

清少納言

忘らるゝ身はことはりとしりなから思ひあへぬは涙なりけり

[illegible]男につかはしける

よみ人しらず

今[illegible]我そたゝ人と忘れ[illegible]

中納言通俊

[illegible]侍りける女の[illegible]

流れては[illegible]人とゆ[illegible]

也事

中納言通俊

浪こえてあまの袖にはいかにとてうき人をとふ身のみぬるゝ袖は

おなし所にて男のわすれし小舟まきよる

和泉式部

いくかへり流れし人を見熊野のうらめしからぬ恋しかるらん

大江公資にわすられてよめる歌

相模

夕暮は待ましく物とはなくらん人を我おもひしそやすき

もよほしてかへる人をしらせよ

忘らるゝ人のめくりをつけなくてきこえのかへる浪かな

詞花和歌集巻第九

雑上

所々の名を四季によせて人々歌よみ侍けるに、みしま江の春の心をよめる

源頼家朝臣

春霞かすめるかたや津の国のほのみしま江のわたりなるらん

堀川院御時うへのおのこどもをめして歌よませ給けるによめる

源俊頼朝臣

すまのうらにやく塩竈の煙こそはるにしられぬ霞なりけれ

おなし御時百首歌たてまつりけるによめる

浪こゆる松のこすゑをみて[illegible]

播磨守に侍ける時三月ばかりに舟よりのぼり侍けるに、津の国に山路といふ所に参議為通朝臣しほゆあみて侍ときゝていひつかはしける

平忠盛朝臣

かつらゐさ霞の毛もとしらぬ我を何ゆへそくつる

はるばるとありの世行すゑに桜花のさく

たりけるを見てかの庵にさしせさせてよみ侍る

修行侍 花山院御製

木のもとを栖とすれはおのつから花見る人となりぬへきかな

人のもとにまかりたりけるに桜のおもしろく

咲くなるをきゝてあるしにいひつかはし

侍りける 天台座主源心

あかなくにとまりてそみるちるを見よさらは身にてやはるをくらさまし

花おしむ心をよめる 大蔵卿匡房

よろつよは嵐にたえぬ花もなしけふの雪とやふりまさるらむ

宇治前太政大臣花見に侍りけるにまかりて

よみ侍りける 堀河右大臣

身にかへてあやなく花ををしむかないけらは後の春もこそあれ

二条関白白河へ花見になむといはせて侍

けれはよめる 小式部内侍

春のこぬところはなきを白河のわたりにのみや花は咲くらん

入道摂政八重山吹をつかはしていかゝ見ると

いひて侍りけれはよめる 道綱母

誰かこの数はさためし我はたゝとへとそおもふ山吹の花　　大納言道綱母

新院位におはしましゝ時后宮の御方に
しらかはへ乃かのこゝろをとめしく藤花
年久しくにほふといふことをよませ給ひける
によめる　　大納言師頼

春日山北の藤浪咲しよりさかゆへしとはかねてしりにき

修理大夫顕季美作守に侍ける時人々
つれて布引の瀧見にまかりける時馬に

侍ける故子内親王の女房二車ゆう
てさくら見に行て歌よみて明はなれて
ゆきわかれけるにかの女房の車よりとて
見さくらやかねて侍ける御さくらをそへて和歌の浦にをりつかはし
けるをとかくせしといひ侍従(?)に答よしよ見れは

　　贈花大臣

和歌の浦といふにおもふことの風吹は浪の花こそおもひこそすれ

左京大夫家成布引の瀧を見にまかりて歌
よみ侍けるによめる　　藤原隆季朝臣

雲井よりつらぬきかくる白玉をたれ布引の瀧といひけむ

新院位おりて侍し時のおほんの草

津の国といふ所に侍けるに

大蔵卿行宗

難波江の芦のすゑ葉さわぐとて秋さへ月は宿る哉

むし侍る　律師澄覚

思ひてもみしこそ我身をたのみしとして山の月をまちし

又此実信院守よりくわ侍けるにて

ありてつかうまつりけるに左京大夫顕輔

家に哥合し侍けるによめる

藤原為実

名にたかきことゝて山のはもこよひ斗は月にかゝるき

月のあかく侍ける夜人々まうできて酒のみ侍けるに月はいかにて侍けるといふつきそ

そのくかつらかんこゝろけ侍はいかなる

大中臣能宣朝臣

月はかくしてあかれて移や我は宿れる多く

おもしろくなるさを移く後へ条院の池に

月のすみて侍ける夜人々まいりてよみ侍りせ
まひるか　　小一条院御製

池水の底まで月はすまふらんなれども人の心をそかは
左京大夫顕輔中宮亮にて侍ける時下野
小おくらの庵にて家にて宮の女房たちあまた
ありてけきやたちの家の池手に雑とい
なくて

世の中をおもひみるにそこひとしれぬ満月の夜をしのぶら
田舎の月こいふく残りより世捨ひあれ

新院御製

月さそふ田中に出てながめかねけんかかるよにわれぞかはる
新院位におりさせ給てのち月のあかく侍りける
よ女房たちに添へ侍

大政大臣

宿のおりの月は光よさえてありし雲のうへにのみこそ見れ
あまてらす風をとに月のもりくる侍けるかと

しかは　　良暹法師

板まより月のもるをもみつるかな宿はあらしてすむへかりけり

題しらす　　内大臣

くまもなき志のゝ枕やさえぬらん夜の袂にうつる夜半の月影

山家月といふ事を　　源道済

さしもふかきみねへきし山里とこそ人の月にうつろひにけれ

新院殿上にて海路月といふ心をよ

める　　平忠盛朝臣

ゆくへあさみぬかならてはる雲の波路に月をこそみれ

題しらす　　橘為義朝臣

君待と山のはいてゝ山ふかく入ぬる月をかくて待哉

堀河院の御時中宮の御方にて女房に

歌よませ給ひけるに月の山のはにしらたらの

かりけるを見て女の月を待よしをよませ給

みえあかつきの存るにつけて待人をよめる

大納言公実

待人は待ともあかの月なれと入ぬとつけよ世はあらしん

題しらす　　花山院御製

心みにほかの月をもみてしかな我宿からのあはれなるかと

月のあかく侍りける夜大納言にまかりて
ものかたりなとし侍りけるにおもしろく
侍るよしくらふ侍りし後につかはしける

中務卿具平親王

ふけぬめる夜半の草むら月よにこゑ／つもとに待とかけ
屏風の東に山の上に出たる月みる人
かたかけるをよめる

大江嘉言

かつ山のはにてまつをまつれとも夜のなきまゝ月はみえけれ

家に歌合し侍りけるによめる

左京大夫顕輔

秋もかくふけて尾上の松に雲きえて清見か関にいつる月かけ
山しろのゝふるさとにまかりて侍りける夜月
のあかゝりけるをみて我やとのことを人のいつ
らんとおもひ侍りけるによめる

藤原輔尹朝臣

山城のいはたの森のいはねとも心のうちにすめる月かけ
そのまゝにせぬ人のこゝろへ月あかき

秋の比はつゝてよめる

中原長国

月小よ方着れこゝハおわゝし我とらてへヽよ世くや
山しなちちも浪らありちあり小宋延法師
よあひく我てとかて物ハ待けりに逢明
の月ゝさ山よりはしのはりな無きとこそ
よめる

琳賢法師

かくへくありしあつせん思つてよ君こそ見ゝれ山の端の朧月

京極前太政大臣家哥合によめる

大荒木道房

相坂のせきの杉原志たハれて月のもるにそまかせたりける
流くるからかての浪て未てもとすゝ待夢
無承おもひて何を春ゝ可まし小夢の下に月
いとおしく待てまこしとよめる

帥前内大臣

里しくおもひて無有成新して月くもりの音成かれ

題志らす

高松上

深くいりて宿やと思ふ山の月も哀とやいふらん

なくひは(?)小侍らむしてあつかひこそ也なやちとも
あらしふとうし見人なまきくらう哉

和泉式部

とうのをのへつらるをとおとゝの旅なりひとりたん
思ひすてる男也いうたしか人五月五日ある
明くる後ゆるくあやめまゐりきの人侍りさと
いひおくりけるか返事によめる

あやめ草かりにくらむものゆへにねやのつまとや人の見るらん

保昌に忘られて侍りける頃兼房朝臣とひて侍りけれは

人しれす物おもふことはならひにき花にわかれぬ春しなけれは

藤原盛房かしこまりて侍りけるに成範
後拝五月の五日は時鳥ゆかしけれは
こかけいはぬ流れきさらぬ菖蒲にて思ひつらぬす
小くいつの宮哉　よみ人あすか
思ふまゝならぬ身なれと折々に秋の時雨や月の

題しらす　待賢門院堀川

あさ人の時雨や月のまえや(?)伝えしそ元よあたらのまたさけ
き

なくに事かとこの文月いる思ふ哉ともます
て未ら字まきしもあれ
しらぬ人へおくりし
非常にかゝる雁ひかりて時鳥頃山路のたひゆかん
為のめたるよみてさら事かとこの後よ海う
てまり字為にいまあひ合さらけまいひをいふ
清さきまとおとせつるみて侍るを見つけまし
しもあれ　清少納言
うしとてもさは我にかくいひなしのそこあはれ　雅ましとて

書後さらおこのいそぎのひ守人ほめけるか
くもりなき暁月夜のいつくゆる事まきは
朝にいひはらしけれ　江侍従
くさのみも枝は夜にいてせしゆめはなちて思ひまきかな
むすひける　藤原能忠
ならくもともあはれなる人君かへよるまそかくるゆゑかな
いくよひと事かとこのさてくいとをせさり
たれもいひはらして　宗西

赤染衛門

世の人の忘れぬよりも此まゝに祭ぬる日にはこの祭をせしかは
伊勢にはこれありけるにこの八月ともがら神に露
けさのことゝいひける事にもあれ

和泉式部

秋はこれなにふることのさ萩の葉にも清ければ見ゆる
藤原隆朝臣物といひ侍る女に忠清かよひ
侍りしに忠清かよひけるを聞きて知るべし
かくれもなき忠清か身隆重にあひぬとぞ

らの女よといひ侍りしうた

藤原忠清

いつはりのあるよとはおもはすけの
月のおもひにあるなり

逢志てあ

相模

行き春にわが恋ひさせることを流してあやさふれはあかぬ命か
物おもひ侍りけるにあか

大納言道綱母

浅き名とおもひておもふ事は
ことなきの花の...

みつ老ぬらく有明の月のさやかなるかな
すかの儀よりなくて時雨なかりせはと見るかな
しあれ　赤染衛門
神無月有明の空のしくるゝを又我ならぬ人や見るらん
思ひしりてひとりねられぬ夜半は
出羽弁
思ふことすくなからねは身よ海のあまのいさりひ
志のひかねこれならぬさかとうしか
海とてとこの字をましよ見えむ

和泉式部
音せぬはくるしき物を身ひとつにつらきを人にしらせはや
おもひしらるゝ人あるかはらなとかくまてあらんとこそ
みんなにぬ海をこえひとりおもふこゝろのまゝに
しあれ　大貳三位
人の世に二度あるならはしのはしも思ひあまる名をもこそ流し
きてみむ　左大弁俊雅母
夕霧にさのゝ船橋音すなりてなれの駒のかへりくるかも
長元八年宇治前太政大臣の家に哥合

侍りにちかくておのこともて住吉に詣く
て哥よませ侍りけるによみ侍る

式部大輔資業

住吉の浪よ見えさふ松ちりて神のしるしをあらはれなきかな

物へまかりける道に人の侍りけるに川渡か
つきさりやあつこころせす侍をおもひ出侍る
よめる

周防内侍

住そかく移とたてせ花人あやめ草よさゝふ子舞しそのあさくさ

冷泉院へ参りむかえさ侍せ給とてよまし
せ給ける

花山院御製

世の中にふるかひもなき竹のこはわかへむとしをたてまつるなり

御返し

冷泉院御製

年へぬる竹のよはひをかへしてもこのよをなかくなさむとそ思ふ

おなしころ人によめる

和泉式部

あかつきにおもふ山のまつよたれすら槙の戸のすけさは（もイ）

津の国こそへこいふ所にこもりて荒木大納言
ちかくへいひはへりける

能因法師

ゑとまるに山田のかりの身こそおもき我のゝ人と露ときぬ
後二条関白よりのまへに事ありてむつかしう侍れ
しきぬつらふらふ侍ふらふあまて候へは申侍て
女房の中よりいひ入侍ける

源仲正

刀のさしもさしにけふかくれくすみしかるも天のさき
おほろけのやしこゆみるをみて侍るを成
傳正源光ましく極りて侍とましくて北乃

しかひうひすし五月めのはらからくしあれ

平致経

君か頼むあやのほりしはあやのまいなるのぬとらぬしまし
長頼辞のつらうとあは

源道済

思ひつゝ秋かりし野あきときてこれしあからの原に秋風そ吹
うらの国のしてての入りの侍者のふかけ
ゝかれ松光もとにはかしあれ

橘為仲朝臣

思へ我はくらゐ多宇くゆの梢は枝はつよしとゝふ
よふしなとそ侍けるにかの名なれは
つりとのにいてゝ見けれは小松にかゝれる藤を
見てくつにつけて侍ける
左京大夫顕輔
枯はつる藤の末葉のかなしきはたゝ春の日をたのむはかりそ
帥前内大臣明石に侍ける時恋かなしみ
てやまひになりてよめる
高内侍
よのつるのみやこのうちにこめられてこをこひつゝもなきあかすかな
堀河院御時百首哥たてまつりける
によめる　大納言師頼
身のうさは過ぬるかたを思ふにも今行末の事そかなしき
大蔵卿匡房
埋木の下はくちれと古の花のこゝろはわすれさりけ
むしてそ
大納言伊通
今はたゝ着そつ○小夜ころもかへるとも思はて
小野宮右大臣のもとにまかりて侍けるか

いひくしらす　清原元輔

老ぬれは若き身ふ深くうらみ人目をもつゝむのてうけき

むしらさ　賀茂政平

ゆきみる古ころ迷てゝみいまる月はてすみけれは

新院御時七百首哥にたてまつりける

かよみれ　藤原季通朝臣

いつとても我身ふこそひとくにき世の物にあれ

神祇伯顕仲ひろきにて十首歌合侍ける

寄月述懐心といふ心をよみてことに

待まさに沈りてよみ侍ける　左京大夫顕輔

難波江のあしまにやとる月みれは我身ひとつも

しつまさりけり

詞花和歌集巻第十

雑下

都にすみわひてあつまにまかりけるに
所をさかりてよめる

源俊頼朝臣

道たえて多く山の梢は世中をあくまてあさかりてぬる
女ごゝろ涙にくれ筆はそらしとそしらぬ
しのふのかくれ沼のうきはいはれてよへき親ともなく
絶えて厭ともくはかなし鶴鳴皐と

いふ事をよめる　藤原公重朝臣

あしたつの雲井を出てあらしの浦へよはひや経らむすみのえの
新院六条殿におはしましける時月のあかゝり
ける夜よもすからまてしまゝすといふ事を
よみあはせ侍ける時によみ侍ける

右近中将教長

見し月はさやかに明にけるやらむ世にめくるたひしもの
桜花ちるをみてよめる

藤原實方朝臣

哀ともふまくゝとおもひしかと流るゝ我なみたかな
世の中さハりて見えけるかなあはれ

増基法師

朝おくしのゝめのしらしら蘇のえに東風に露のきえぬや
秋の野に花ならぬ花の風より
まひくとうてよあれ

源親元

花さくきさくら桜をてふく風の吹ハ深き山の井の
山のまヘハ雪のあかさま深き山の井

夢

下条中宮

くれはふる夜も夢のちりのこさきて我か忘るゝ
世中ハうつゝおもひきさへも夢なるはよしの
給守れ

花山院御製

かくしつゝとにかくにむかへ世中の鐘のひゝきを
入あひの鐘のこゑとやくよあれ

和泉式部

夕暮ハ袖をしほりき帰るにも夢なれやくさ所さへ志つ深

大納言忠教

身のうき事ならて春宵

ろなくなくよみける

藤原教良母

常よりも涙のおちけるをりしもやまにかへらんとせし人

しのびてさしのぼりておもひて侍りけるによめる

法橋清昭

こひ人の君かたからにぬれもとはしけにさかへこそと

一夏の間(?)くらにおやくもとこそ侍りける

もとに女にやとりてかへらんと侍りけるに

神祇伯顕仲女

はまべに月待ちこそかなしきに恋ひしき風は海に入

病おもくなりて侍りける時は雲のあるかと見え

よめる

良暹法師

おもひやれ君こそ道とせしその山には雲とてはかくもなし

大江挙周朝臣おもくわづらひて侍りけるに

みてかはりて侍りけるによめる

赤染衛門

かはらむといのるいのちはおしからでさてもわかれんことぞかなしき

病おもくなりて侍りてのち三井寺にのぼら

んとて京の坊に侍りけるに申しつかはしける

しいと今は萩さくぬ人も人をやこゝろゆち
けさは我にかれかりしてこそ世にわかれしあれ
大僧正行尊
世中は又あふさか柿本ちりくるの人も恋しらぬしき
そのつら池のもなけりあけるとも
人の心をおとろせく待つ成し見れ
少人心つ寄
このみとはむねにこゝろのうきはつらき人こそあらめ
こそ
おもふ
詠し次
増基法師

我おもふよのこゝろけふふくるまゝは心の花の枝かねつは
大江以言
網代よは心もこゝろもみわけりなれにも我やしは
大かたに何をもなけけ後撰朝臣のかくは
ひつくろそあれ　良暹法師
大原やまたすみかもゐまさすとは我をこの抄なるから
詠しつ寄　覚智法師
淀川そらふかかくと君ゐましは世となれよはわかぬから
此集撰侍して家の心すゝしく待まし

よめる　　太政大臣
おりしも尾上のかねのあさけにはまつのかせへこそのこゑは
周防内侍あまになりぬときゝていひつかは
しける　　大蔵卿匡房
かりそめのうき世の中をとくさかく酒山なしていつる月哉
清輔卿にまかりて後左京大夫顕輔か家にて
帰雁といへる　　沙弥蓮寂
故郷へいそきもせしむつきとよおもふとさははさけて故
ひとつ声　　みな人へしらせと
身をとゝめへるはに捨かねてあはれみてすむかほのさと
藤原實家ひさしのとけん侍ける
大納言月のかけひさくてかへりなとせぬ
に大蔵卿匡房かしつく侍けるかを
たかえく侍けるに伊勢に侍ける哉
皇太后宮肥後
法ぬ山かくれて心にし色の橋わたるとも
下らつ心にしられく堀川院のかりに侍り
るかへのもとへおくりはてゝ世をわたれ

流かくしあれ　大中臣能宣朝臣

白浪もくれといくたひかへるらしこゝろ成にけり

白河院位におりて侍りける時修理大夫

顕季みつをすゝまいらせしと侍けるを宣旨

のとをくくらう寺務してその名かはりし

侍りけるか　津守国基

雲の上は月こそさやにおもほえねこれそ我地の

返事　修理大夫顕季

此ころはそれまて住吉の人

新院位におりさせ給ふ時人々のおのこことゝも

として述懐の歌よみ侍りけるに

白河院みこと綾してめつらしくおもひ侍りけれ

し　大納言成通

白川のふるきを猶見つゝといひそふるにきつるかな

堀川院御時百首歌中よみ侍りける

大蔵卿匡房

もろともに竜に庵をかまへてき今日ゆくかはしてそ絶

新院御製

久かたのあまのかく山あけて秋ふかきより光さしそめ
むかしのけふしかゝる世有けんおくよ書
付ける女　　　源義國妻
木のはふりさえつめゝ雪紅葉とゝ松風寒の残
左京大夫顕輔あふみのかみに侍りける時
こほりのよはゝりけりかはゝ家にて以
はゝりてよめる　　関白前太政大臣
思ひ〇そまさる秋風しら山のこにかゝ雪さそ
新院位におはしましける時海上遠望といふ

事をよませ給ひけるによめる
和田の原こき出てみれは久方の雲井にまかふおきつ白浪
後冷泉院御時大嘗会主基方御屏
風に備中国なるくら山よりあまたの人
花つみてかへりけるによめる
藤原家經朝臣
うらしまてたくる山よつもしもむかしの花さかりそとこそ草の花
今上大嘗会悠紀方屏風にあふみの国
いくらの山田にいねかりくらたる所に

よ発句　　　左京大夫顕輔

いく〳〵の山田にけふるいねと見へくおさまる代の花と云ふ

崇徳院御時堀河院よ二ての元狩章

せさせ給ひけるによめる

曽禰好忠

あと絶えてかへるまてハ君か代に二度とめる堀河の水

あらさりつゆふさりかりあるにしあ

宇治前太政大臣

いさやまた清きをしりぬたなはたに二ふくまてへよ知とたふ

紅葉へまかりてまかりけるに月を見てよめる

道命法師

文古にく見る月にむかひて小板のやにかへりて

よわ夜ふけ待ちける時月を見てよめる

帥前内大臣

都にてすめる月をみる時も旅のそらにておもひやりけり

志らのくみかくらうすれにかきこりの

題しらす

藤原家経朝臣

みきこりのうちへよるにはそれにそれ袖にそ心は

藤原頼任朝臣のくたりてくらし侍る
ころふかくこ八月十五夜月を見てかの国
のうきにまかりてくらし侍る夜かきいふこと
とこにてよめる　藤原隆経朝臣
昔見しよの井ものはかなき秋のなかきを月のよに
帥前内大臣くにゝ侍りける家ともに
ふてまつりて月あかくて侍りける
　大江正言
おもひてのさまてのこゝろまてとくまゆくそ秋の月

三条太政大臣家にて八月十五夜月を見る事
よみ侍　前大納言公任
在ら瀬りくもなきくもよりもあきの月
むかしのかとゝまりてすみけき侍かなへの月
のかゝみとなりていはゆくしられ
　堀河右大臣
枕ちかくねもやらてこの城ののうらしく月をこゝろ人
何ともしれ太大臣家にかりあそひはしめ
　藤原相如

夢にてもみゆらんつきせぬ袖のうへにさめてすけなき
堀河中宮かくれさせ給ひてのちなくなりにけれは
よませ給ひける　承歓院御製
こゝろからのこりてありし身のうさはかなしとも見るにたれかしる
一条摂政身まかりにけれは
少将義孝
時雨けさ庭を袖にこれ葉とゝふにうき[illegible]
子のおもひに侍けれは人のとひて侍けれは
よめる　待賢門院安芸
人しれぬ袖のしつくをなにとたにとふこゝろのかきはらはす
藤原蔵子よりとしをへて[illegible]とやつれてはへり
しあれ　清原元輔
おしみなくおもひしこのみをなけきてすけさは涙とゝもに
天暦の御門かくれさせおはしまして七日ゝの
忌にあたりてちりくにたはらかに女房
中にとり侍ける
うきよりはたのしき人は別れにもあらはなるへし
ぬるよしも人はしらす

七夕ハ後のあふそそ祈人〳〵ひそさハ我身成りぬり
むらめかとく猶くうてき待とてもある

神祇伯顕仲

あさ日さすやまよりさすゝみのゝ夜の神と我のみそ
大江通郷方後りてみのうへの花と
見えてもある
赤染衛門

さそはれし花見にて…のうちの
後冷泉院御時殿上人を花見にさそひ
ゝ猶おつ御ふみをしてもある

藤原有信朝臣

淀のまかは世の中に身さへ今しらぬかなしき
たゝこゝろに猶しく見ゆ

よみ人しらす

折くれは猶さこそのゆふさは花をそ折まれぬ
人への四月九日の御経文よりさつらすれ
人をこふかなしき声のまゝ我かこに人をしのふ
丹さいら待女あの女のまへゆかされしたな
いとのくす後りにやまとしさ待ける

六条中宮

夕暮にくて見えそめけるはよへの世の露とはかなき心地と
いまはのこころぬふりかへりつゝくなき寺の寺
すゝへしりぬる

かくの世にかた明け月のはてしくてよにかくての神
おやの處分かと猶へすくへよそ我心きけ
とゝこいらく給へいなかりふ亂る
いおのや菩薩師の夢いかにへかり
いひかし給ひつらぬ寺

かの世のかきさま我ならへいかゝける花くるみやら
かの茂のいはさこやんなる時かしよむいは
ていひ見れ　選子内親王

おもへとていとこくいかにすゝへそなくむさて猶その
ゆくら

伝教大師国清寺五十餘年ごといふこと誠
しら歟　祇伽那仲

あくらさみやくさんぼだいの世のほとけたちわが立つそまに

即身成仏といふことをよめる
ただ人へしら見

寂の名きゝて仏になりけるは法にあひて後そしつへかりける

舎利講乃次てに願成佛道の心を

くもりなき鏡にしも行夜にしも行かむ

関白前太政大臣

ちかひをは仏の道とたのめ人我かしるへするまよひけるかな

左京大夫顕輔

浄くて我か心の月とむかふとて庵にはやくへ夜へとて人

常在霊鷲山といふ事を

登蓮法師

世乃中乃人の心のうき雲に空かくれする有明乃月

九州大學圖書印